

# 講演 源氏物語の六条御息所の物の怪

増田 繁夫

一 御息所はなぜ物の怪になったか

二 遊離する靈魂

三 物の怪の発現例

四 「後ろめたさ」と「良心」

六条御息所が物の怪となり葵上に取り憑くほどの忿怒をおぼえたのは、葵上が車の所争いで御息所の存在を無視してふるまい、誇り高い御息所の自尊心を打ち碎いたことによる。

十世紀に入ったところから貴族社会に物の怪が広く跳梁するようになるが、それはこの時期になって人々が内面世界を深くしてきたことによるものである。その結果、人々は理と非理、善と悪などの倫理的観念を発達深化させてきた。物の怪の顕現には、物の怪を見る側の人の「おびえ」や「後ろめたさ」の感覚がの発達に不可欠である。そしてこの「後ろめたさ」は「良心」の萌芽と考えられる。

本日は「物の怪」というおどろおどろしい題を掲げまして恐縮です。

さて、「物の怪」という語は十世紀後半ごろから見え始めます。つまり、物の怪はそのころから人々に意識され始めた新しい概念で、以後急速に人々の内面世界に大きな意味をもつようになってきます。物の怪については当時の人々の日記や物語類に数多くの記述がありますが、その中でもっとも詳細なものは源氏物語の六条御息所の物の怪（生霊）の記述です。ただし源氏物語はフィクションですから、そこに書かれているような現象が現実にもあったかという疑問もあるでしょうが、物の怪を実際に見た当時の人々の日記などと比べても、源氏物語の記述は十分に写実的だと認められます。

平安時代四百年間は大きな社会変革もなく平和な時代として知られていますが、人々の内面では大きな変化が起っていた時代、人々の心が深化し複雑になってきて、それまでの古代と呼ばれる時代から次の時代へと歩み始めた時代であったと考えられます。物の怪という現象も、当時の人々のそうした内面世界の複雑化深化と対応していると考えられます。この問題は短い時間で述べられるようなものではありませんが、本日は六条御息所の物の怪の記事をとりあげてその一面を考えてみたいと思います。

源氏物語という文学作品のもつ意味の一つは、十世紀という過度期の時代を生きた貴族女性たちの当面していたさまざまな問題を深く描いているところにありますが、六条御息所の生霊の問題もその一つなのです。

### 一 御息所はなぜ物の怪になったか

御息所が生霊（物の怪）になる事情については、これまで一般に光源氏の正妻葵上と、愛人の立場にある御息所との間の妻の座をめぐる争いや、源氏から見棄てられた御息所の葵上に対する激しい嫉妬心にもとづくものだ、などと説明されてきました。二人の関係にはそうした面の認められるところもありますが、源氏物語が御息所の生霊事件によって書いているものは、単に二人の妻の争いといった程度の問題ではなく、もっと深く人間存在の根底にも関わるものとして取り上げているように思えます。

御息所がおぞましい生霊となり葵上に取りかかることになる直接のきっかけは、賀茂祭の御禊見物に出かけたときの葵上の車との場所争いでした。

よき女房車多くて、雑々の<sup>ひま</sup>人なき隙を思ひ定めて皆さし退けさする中に、あじろ網代の少し馴れたるが、したすだれ下簾のさまなどよしめるに、いたうひき入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など物の色いと清らにて、こ

とさらにやつれたる氣配しるく見ゆる車二つあり。

「これは、さらにさやうにさし退のけなどすべき御車にもあらず」と、口強くちこはくて手ふれさせず。いづ方にも、若き者ども酔よひ過ぎたち騒さわぎたるほどのことはえしたためあへず。おとなおとなしき御前の人々は「かくな」など言へと、えとどめあへず。

齋宮の御母御息所、物おぼし乱るる慰めにもや、と忍びて出で給へるなりけり。つれなしづくれど、おのづから見知りぬ。「さばかりにては、さな言はせそ。大將殿をぞ高家かうけには思ひきこゆらむ」など言ふを、その御方の人まじれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。つひに御車ども立て続けつれば、人給ひとだちの奥に押しやられて物も見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。楊やなぎなどもみな押し折られて、すずなる車の筒とうにうちかけたれば、またなう人わろく悔しう、何に來つらんと思ふにかひなし。

(新編日本古典文学全集・源氏物語、葵・二二―二  
三頁)

六条御息所が生霊となり葵上に取り憑くほどの激しい怒りをおぼえたのは、都中の上下の人々が集まっている一条大

路で、姿をやつしてひっそりと御禊の行列の見物をしていた御息所の車を、後からやつてきた葵上の一行が、多くの人々の見ている前で御息所の車だと知りながらも追い払い、まるで庶民を扱うように御息所を軽くあしらい侮辱したことにあります。そのことは「年ごろはいとかくしもあらざりし御いどみ心を、はかなかりし所の車争ひに人の御心の動きにけるを、かの殿にはさまでおぼし寄らざりけり」(葵・三三頁)とも記され、さらに次の御息所の生霊が発現する場面でも繰り返し述べられています。

大殿には御物の怪いたう起こりていみじうわづらひ給ふ。この御生霊いみずたま、故父大臣の御霊おとどなどいふものありと聞き給ふにつけて、おぼし続ければ、身一つの憂き嘆きよりほかに、人をあしかれなど思ふ心もなければ、物思ひにあくがるなる魂たまひはさもやあらむ、とおぼし知らるることもあり。年ごろよろづに思ひ残すことなく過ぐしつれどかうしも碎けぬを、はかなき事の折に、人の思ひ消ち無きものにもてなすさまなりし禊ひとしぎの後、一節におぼし浮かれにし心鎮まりがたうおぼさるるけにや、少しうちまどみ給ふ夢には、かの姫君とおぼしき人のいと清らにてある所にいきで、とかく引きまさぐり、うつつにも似ず猛はげくいかきひたぶる心いできて、うちななぐる、など見え給ふことたび重なり

にけり。

(葵・三五〜三六頁)

御息所が生霊にまであつた直接の契機は、葵上が御息所の存在を「思ひ消ち無きものにもてなすさま」であつたこと、御息所という人をまったく無視し、まるで御息所など存在しないかのようにふるまつたからだ、とあります。夫の東宮の亡くなつて以来、あらゆるこの世のつらさ口惜しさに物思いを重ねてきたけれども、これほどに侮辱され屈辱感をおぼえ、心の碎ける思いをしたことはなかった、そのことが生霊となつて葵上の許に出かけるほどの忿怒をもたらしただ、ということです。愛人の立場からする嫡妻への嫉妬などといったことはまったく考えられていません。ここに認められるのは、自分という存在をないがしろにし、自分を傷つけ損なうものに対する激しい怒りであり、自己の尊厳を保ち護ろうとする御息所の誇り高い心なのです。この御息所のように強烈な自尊心をもつて生きている人物を描き出した文学作品は他にありません。

私は、六条御息所に限らず源氏物語の女性たちはいずれもが自恃の心を固く持ち、自己の尊厳を護ろうとする強い意志をもつて生きている姿に描かれている、作者はそう書くこととしていたと考えますが、殊に御息所は高貴な身分の人なので誇りも高く、またそれが傷つけられたときの口惜しさや怒りも激しいのです。帚木巻に描かれた空蟬は落ち

ぶれた中納言の女ですが、かつて娘時代にあこがれていた光源氏と思いがけずも一夜を共にすることになり、初めて身近に見聞きする源氏の物腰のすばらしさや、自分を口説いてくるその巧みな言葉にうっとりとしながらも、源氏から自分がまるで下女のように手輕に扱われているのを知ると、身も心もすっかり冷めてしまつて、こんなに卑しい身分の女にもそれなりに誇りがある、いまのこの扱いには堪えられない、と毅然と云い放ち、それから体を堅くしたままで、決して源氏に打ち解けようとはしなかった、とあります。

さて御息所は、葵上との車の所争いで激しく忿怒したことにより、突然に生霊になつたわけではありません。その事件の起こるずっと以前から、御息所には自分が世間から不当に軽んぜられ無視されている、という口惜しい思いをかみしめながら生きてきた長い鬱屈の生活が続いていました。御息所は、まず皇太子妃として世に出て以来、やがては皇后と予定されていた輝かしい身の上でしたから、皇族でもない光源氏の妻に過ぎない葵上とは明らかに格の違う身分です。それが、夫皇太子の突然の逝去により御息所の生活は一変して、貴族社会の日の当たらない片隅に迫いられました。父大臣も早く亡くなり、有力な地位の親族もいなかった御息所は、世間からしだいに無視され忘れ去ら

れた存在になってゆき、たまたま御息所に興味を持つて強引に近づいてきた光源氏もすぐに足が遠ざかり、世間では御息所は源氏から棄てられたと噂しています。

さらにその上、御息所の産んだ皇太子の忘れ形見の姫宮が斎宮に卜定されて、遠い伊勢の地に行くことになりました。斎宮は皇祖神伊勢神宮の祭祀を行う重要な地位ですが、いつまでと期限も無く遠く寂しい伊勢の地で過ごさねばならない辛い役目なのです。伊勢崇拜の念も薄れてきたこの時期になると、有力な内親王は斎宮になるのを嫌がり、あまり勢力の無い内親王が斎宮に選ばれるようになってきていました。このときの斎宮候補の筆頭であった弘徽殿太后腹の内親王は、それまでと変わらず都の傍らで生活することのできる賀茂の齋院になり、遙か僻地の伊勢に暮らさねばならない斎宮には、有力な身寄りのなかった御息所腹の姫宮が定められたのです。もはや都の貴族社会での屈辱的な生活には堪えられなくなっていた御息所は、娘の斎宮に従って伊勢の地に赴き都から姿を消そうと決心していました。当時の伊勢は御息所などの高級貴族にとっては地の果て、今であればアフリカの奥地に行つてそこでずっと暮らす覚悟を決めるようなものですから、御息所はそれまでの自分のすべてを投げ棄てて辺鄙に姿を消そうと決めていたのです。そんなつらい決心をしていた御息所に対して、葵

上はさらに追い打ちをかける役割を果たしたわけです。ずっと以前から御息所は自分を軽んじ無視してきた貴族社会を恨んでいたのですが、葵上が御息所の誇りに最後のとどめをさしたことにより、御息所の怨念はもっぱら葵上に集中することになり、生霊となって取り憑いたのだ、と考えられます。

## 二 遊離する靈魂

六条御息所の生霊が顕現したときの言動などについては、葵上の出産の場面にもっとも具体的に記されています。

まださるべきほどにもあらずと、皆人もたゆみ給へるに、にはかに御気色ありて悩み給へば、いとどしき御祈り数を尽くしてせさせ給へれど、例の執念き御物の怪一つさらに動かず。やむごとなき験者ども、めづらかなりともて悩む。さすがにいみじう調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、「少しゆるべ給へや。大將に聞こゆべきことあり」と宣ふ。「さればよ。あるやうあらん」とて、近き御几帳のもとに入れ奉りたり。……（源氏が葵上ヲ慰メル言葉ヲカケルト）「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばし休め給へと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、物思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」

となつかしげに言ひて

嘆きわび空に乱るるわが魂を結びとどめよ下交の  
棲ま

と宣ふ声、氣配、その人にもあらず変り給へり。いと  
あやしとおぼしめぐらすに、ただかの御息所なりけり。  
……「かく宣へど誰とこそ知らね。たしかに宣へ」と  
宣へば、ただそれなる御有様に、あさましとは世の常  
なり。

(葵・三七〜四〇頁)

御息所の生霊が取り憑いた葵上の身体には、御息所の氣配  
が現れてきただけではなくて、「ただそれなる御有様」と  
御息所そのままの身のこなしや姿態を見せて、さらに葵上  
の口をかりて源氏に話しかけ歌まで詠んだりしたというの  
です。

当時の人々の考えていた生霊（物の怪）というのは、人  
を激しく恋い求めたり強く恨んだりしたときに、ふだんは  
その人の身体の内定着している魂がさまよい出て、対象  
の人の許に出かけて行く、というものです。

1、口無くてはいづこよりか魂たまはむ、腹、胸無くはい  
づこにか心のあらむ。

(宇津保物語・俊蔭)

2、昔、男、密みそかに通ふ女ありけり。それがもとより  
「今宵、夢になむ見え給ひつる」と言へりければ、男、  
思ひあまり出でにし魂たまのあるならむ夜深く見えば魂結

びせよ

(伊勢物語・第一百段)

3、たまは見つ主はたれとも知らねども結び留めつ下交  
の棲ま、三反さんへんこれを誦して、男は左、女は右の棲を結び  
て、三日を経てこれを解くと云々。

(袋草紙・上・人魂を見る歌)

1からすれば、当時の人々の考える魂は、平生はその人  
の体内（心臓）に宿っているのですが、時として口などの  
体腔から外界へ出て行くことがある、というものだったよ  
うです。この1では「魂」と「心」の語の区別がはっきり  
しませんが、当時の用例からすれば、「魂」は物体を存在  
せしめ統括し支配している霊力、物体の生命力の根源とで  
もいふべきものであり、「心」の方は、その魂が何かを意  
欲したり行動などの活動をするときの機能的側面を主とし  
ていったものの、とても説明できるかと思ひます。

2は、この女の夢に男が見えたのは、女を恋い求める男  
の魂が出かけてゆき女の夢の中に現れたのだと考えて、女  
に「魂結び」のまじないをして私の魂を元の体に還してく  
れと頼んだものです。そうした俗信をもとにして、御息所  
の「嘆きわび」の歌についての通説は、「激しい物思いの  
あまりに、私の体からさまよい出ていった私の魂を、あな  
たの衣の下交の棲を結んで、私の許に還らせてほしい」な  
どと、源氏に頼んだものだと考えています。「下交の棲」



は着物を着て前を合わせたときの下前、裾の内側のことで、す。3からすれば、十二世紀ごろには人魂を見たときに、この「たまは見つ」の歌を三回唱えて自分の着物の下交の袂を結び、三日過ぎてから解くと、その人魂は本来の主の身体に還るとする俗信があつたようで、御息所の歌もこれによつたものだ、とするのが通説です。

ただし、3の俗信は本来の形からかなり変化した後世のものだと思われます。これは既に2の伊勢物語に見えることにより古くからの俗信だとされていますが、実はこの伊勢の百十段は源氏物語と同時代に付加された章段とされていて、さほど古いものとはできません。またこの3については、人魂を見た人が自分の着物の袂を結ぶと、さまよい出ていた他人の魂がどうして元の主の身体に還るのか、着物の下交の袂を結ぶことにはどういう意味があるのか、などの疑問もあります。下交の袂を結ぶまじないの本来の意味は、着物の下交の袂を結ぶことにより、体内から出て行くとする魂をせき留めるものだったのではないかと、私は考えるのです。魂がその人の下半身の体腔から抜け出そうとするのを、下交の袂を結ぶことで閉じ込めておこうするまじないであつたのが、後世にはしだいに誤解されて、3のように人魂を見た人が自分の着物の下交の袂を結ぶだけで人魂はその主の許に還るのだ、というように誤られて

いつたのでしうか。御息所の「思ひわび」の歌の第四句の「結びとどめよ」の語も、当時宮中で行われた鎮魂祭の「魂結び」のまじないを連想させ、魂を魂の緒で身体に繋ぎ留めておくれ、と願つたものかと思ひます。

御息所の歌の第五句は、3の俗信により、「わが魂を」結びとどめよ、下交の袂を（結んで）」と解する説などもあります。ここは明らかに「下交の袂よ」と袂に呼びかけた文脈です。「結びとどめよ」も、体から出て行くこととする魂を繋ぎ留めてくれと願つたもので、さまよい出た魂を元の体に還せ、などと解するのは無理です。この御息所の歌には他にも多くの問題がありますが、本日の話の趣旨から逸れますので省略します。

御息所の生霊は葵上の許に出かけてゆき、殴りかかるなど乱暴したといひます。これは最初は葵上の女房などに取り憑き、その女房が掴みかかったりしたのでしようが、次の段階では葵上の体に入り込み乗り移つて、その口を借りて「嘆きわび」の歌を詠んだのだと考えられます。霊が取り憑くと葵上の様子が変わり、「と宣ふ声、気配、その人にもあらず変はり給へり。いとあやしとおぼし廻らすに、ただかの御息所なりけり」とあつて、葵上は御息所その人になり替わつていた、といひます。さらに、源氏が物の怪に対して誰なのか名乗れと言つと、「ただそれなる御有

様」を見せたというのは、当時の物の怪は名乗ると正体が知られるので、取り憑いた人から去ってゆかねばならないと考えられていたために名乗らず、墓上に御息所そのままの身ぶりや物云いをさせて、御息所であることを判らせたのです。御息所の取り憑いていた墓上がどんな表情や姿態を示したのかは判りませんが、恋人である源氏にだけは、「ああ、これは確かに御息所だ」と判るような身ぶり仕草を見せたというのです。私はこうした所に源氏物語のエロティシズムの特徴を認めます。

### 三 物の怪の発現例

さて、この六条御息所の物の怪発現の記述は、いまの我々からすればとても現実的写実的とは信じられないものですが、当時の人々には十分にリアリティをもち、そのまま素直に受け容れられていたのだと思います。そのことは同時代の藤原行成の日記に見える次の物の怪の記事などからも知られます。二十九歳の蔵人頭行成が、そのころ重病を煩っていた三十五歳の左大臣藤原道長を見舞に行った時のことです。行成や道長は当時最高の知識人たちです。原文は漢文ですが、いま私に訓読して示します。

内ヨリ左府(道長)ニ詣つ。二条殿(藤原道兼)ノ御霊、丞相(道長)ニ託キテ雑事ヲ示サルコト甚ダ多シ。

「彼ノ呉、強大ナルモ、夫差<sup>ふさ</sup>、以テ越ニ敗レ、会稽ニ棲ムモ、勾踐、世ニ覇<sup>は</sup>タリ」ノ句ヲ誦ンジテ曰ハク、「是レ本ヨリ習ヒテ失セザル也」テヘリ。左丞相ノ容顔、病中モ猶ホ鮮ヤカニ、右丞相(道兼)ノ意気、身後、旧ノ如シ。往時ヲ思フ毎ニ言泗<sup>きん</sup>俱ニ下ル。

(権記・長保二年五月十九日)

行成と話していた道長に、五年前に薨じた兄の二条関白道兼の霊が乗り移って、とても多くの雑事を行成に仰せたというのです。ただし霊の言葉の詳細は差し障りがあるためか記さずに、霊が文選に収める賈誼の鵬鳥賦の「彼呉強大、夫差以敗越、棲会稽、勾踐覇世」の句を口ずさみ、これは早くに習って忘れずにいるものだ、と言ったことだけを記しています。霊に憑かれた道長の容顔は色つやもよく、道兼の霊の意気も生前のままであった、というのです。この文選の句は新撰朗詠集にも、「呉強大兮、夫差以敗、越棲会稽兮、勾踐覇世、鵬鳥賦・賈誼」と見えていて、当時の人々によく知られたものであったでしょう。ただし、新撰朗詠集では最初の「彼」の字がありません。

道兼の霊が文選の句を誦した意図は不明ですが、強いて憶測するならば、道兼は兄道隆の逝去により三十五歳で関白になるという幸運に恵まれたのに、その直後に疫病で亡くなったことで「七日関白」と呼ばれた人ですから、志を



果せぬままに手放した関白の地位への未練や、人の世の浮沈の常なさについての慨嘆、といったことが考えられます。

道兼の霊が道長に憑いたことには、自分に替わって執政となつた弟道長の強運への嫉みや恨みの心があつたからではないでしょうか。しかしこれは、霊が一方的に恨んでゐる道長に取り憑いたというよりは、憑かれた道長の側にも霊を呼び込むところがあつたからではないかと思ひます。道長自身もまた兄道兼の生前から、やがて兄を超えて執政になりたい、と強く意欲し機会を狙つていたのが、道兼の死を好機として権謀をめぐらしそれを手に入れたいま、兄道兼の不運や無念さを思いやることで、かすかに心やましさや負い目をおぼえるところが、あるいは「負い目」とまではないえないにしても心を傷めるところがあつて、そこに霊が付け入つたのではないか、一般に物の怪の現象は、憑く側と憑かれる側との相互の緊張関係の中で発現する、と私は考えるのです。

道長は、道兼が亡くなるとすぐに道隆男の伊周と執政の座を激しく争ひ、長徳二年には内大臣正三位伊周の官位を剝奪して九州に追放し、次いで長保二年二月に道隆女の中宮定子を皇后に移して長女彰子を念願の中宮にし、執政の地位を確立します。こうした政争に心身を消耗したのか、道長はそのころ病悩が続き邪霊に憑かれることが多くあり

ました。

左府（道長邸）ニ詣ヅ。奏セラルル所ノ事有リ。事、甚ダ非常也。是レ邪氣ノ詞也。前ノ帥（藤原伊周）ヲ以テ本官・本位ニ復サルベシ、然レバ病悩愈ユベシテヘリ。此ノ次ニ亦示サレテ云ハク、此ノ由ヲ申スノ次ニ竊二人ノ氣色ヲ見ルベシトヘ此ノ詞、本心ヲ以テ示サル所也。先ヅ院（藤原詮子）ニ参リテ此ノ由ヲ啓セシメ、次ニ参内シテ之ヲ奏ス。仰セテ云ハク、昨、濟政ヲ以テ申サシムル所ト同趣也、事已ニ非常ナリ、甚ダ言フニ足ラザル也、縦ヒ平生ニ在リテモ、非理ヲ申スニ於テハ承引スベカラズ、況ヤ今ハ不覺ノ病中ナリ、此クノ如キ申ス所ハ何ゾ許容有ランヤ、只ダ申ス所ノ事ハ相定メテ、追テ仰スベキノ由ヲ仰スベシテヘリ。仍テ亦詣デテ此ノ由ヲ仰ス。靈氣初ヨリ主人ニ託キ、難渋ノ勅語ヲ聞キテ、目ヲ怒ラセ口ヲ張リ、忿怒非常也。

（権記・長保二年五月二十五日）

道長が、伊周を元の官位に復帰させると病が癒えると考えたのは、伊周の処分はやり過ぎだったと心やましさをおぼえていたからではないか、単に病で心弱くなり道隆一家の怨念の応報を恐れただけでも考えられますが、やはり伊周への処罰について道長自身も「後ろめたさ」「負い目」を感じていたからではないでしょうか。道長以外の当時の



院ノ御悩極メテ重ク坐スノ内、又非常ノ事有り、甚ダ  
□怖畏スベシ、只今院ニ参ルベシテヘリ。(女院の)女  
房等云ハク、前典侍(藤原繁子)邪霊ノ爲ニ狂ハレ、大  
臣ト拏攫シ、其ノ意気忿怒、謂フベカラズト云々、丞  
相出デテ此事ヲ示スノ間、心神主無ク、甚ダ怖畏シ給  
フノ氣有リト云々。□濟政ヲシテ大僧都勝算ヲ召シニ  
遣ハシ、朝経ヲ以テ御使ト爲シ院ニ奉ル。暫クシテ丞  
相(内裏へ)参ラル。院ノ御悩殊ナル事無シテヘリ。大  
臣、殿上ニ於テ仰セラル、御祭等奉仕セシムベシ、又  
来タル廿三日ノ御修法□□甚ダ遠シ、近日ヲ以テ勘申  
セシムベシト、又、藤典侍(繁子)靈氣ヲ被リ□□ノ体、  
甚ダ非常也、ム、院重ク御坐スニ依リ、近ク床席ノ□  
ニ候フニ、御足下ノ女房等驚キノ音有リ、顧リ見ルニ  
藤典侍□□手ヲ捧ゲ、取り懸ランガ爲ニ壓シ来タル所  
也、其ノ体、髪ヲ垂レ、更ニ逆サマニ大キニ□□(口  
カ)ヲ張り、放ツ所ノ音、多ク人ノ耳ヲ驚カス、ム、  
適マ三宝ノ加護ヲ得テ□付キ、彼ノ靈ノ左右ノ手ヲ捕  
ヘ得タリ、曳キ居ウルノ後、時剋ヲ経テ、其ノ□□其  
ノ始メニ云フ所関白(道隆)ノ靈ノ如ク、又、二条丞相  
(道兼)ノ詞ニ似タリト云々。

(権記・長保二年十二月十六日)

前夜十五日深更に皇后藤原定子がお産のことにより崩御し、

この日には病悩中の東三条女院詮子が重態におちいるなど、  
いろいろのことがありました。女院邸から内裏に帰参した  
源濟政の言うには、前典侍藤原繁子に邪霊が取り憑き道長  
と掴み合いをすることがあり、濟政にその話をしたときの  
道長は心神を喪失していて、非常に畏怖した様子であつた  
というのです。次いで道長自身が参内してきて言うには、  
自分が重態の女院の病床に近くにひかえていると、足許に  
いた女房等が驚きの声をあげたのでふり返ると、藤典侍が  
両手を前に伸ばして自分に取り懸るうと、上からのしかか  
つてきた、その様子は髪を前に垂らし、口を大きく張り開  
けたすざましい形相であつた、やつと藤典侍をその場に曳  
き据えてしばらくすると、霊が道隆や道兼のものらしい言  
葉を口にしたら、というのです。

この「藤典侍」は右大臣藤原師輔女の繁子です。繁子は  
大臣女でしたが母の身分が低かつたためか内裏女房として  
仕え、円融帝が生まれるとその乳母になり、帝の成人後は  
典侍に任ぜられ、円融院の崩後は東三条女院詮子に仕えて  
いました。その間に道兼の妻となつて尊子を産み、道兼と  
繁子はこの尊子を一帝の女御にしようと考えていました  
が、父道兼が亡くなつたことと遅れて、十五歳にな  
つた長徳四年にまず御匣殿別当として入内し、この長保二  
年八月にやつと女御になりました。しかし尊子は宮中では

「暗戸屋の女御」と呼ばれて（権記・長保二年八月二十日）、軽くあつかわれていました。女御の身分の人は弘徽殿や飛香舎など一つの殿舎を与えられるのが普通なのに、尊子はどこかの殿舎内の日の当たらない狭い所を曹司に与えられていたことを揶揄したものです。当時の「戸屋（部屋）」の語は、壁や厚板などを張り巡らして密閉した建物や塗籠（かまご）のような空間をいいます。そうしたひどい尊子の待遇も執政道長の指図だと考えて、繁子は道長を恨んでいたのでしょう。道長は、兄道隆女の定子や長男伊周に対してもひどい仕打ちをしていましたから、道長を恨んでいた繁子に道隆や道兼の霊が乗り移って道長を襲うことになったのだと考えられます。この繁子には菅原道真の霊が憑いたこともあり（百鍊抄・永延元年末条、続古事談・四）、霊の取り憑きやすい人であったようです。

ここの繁子に取り憑いた道隆や道兼のものらしい霊は、めざしている対象の道長には直接には憑かずに、まず道長を恨んでいる繁子に憑いて、その繁子が道長に襲いかかっています。六条御息所の生霊も最初は葵上の女房などに憑いて、その女房が葵上を「ひきまさぐり」「うちかなぐる」などしていたのが、その次の段階では直接葵上に取り憑き、その身体を乗っ取ってさまざまな身振りをしたり源氏に歌を詠みかけたりします。このあり方は行成が日記に記す道

長に憑いた霊や、藤典侍に憑いた霊の言動とも共通するところが多くあり、しかも源氏物語の方がより詳細に深く記述されています。こうしたところから物語の御息所の生霊についての記述は、当時の人々にそのまま素直に受け容れられていたに違いない、と私は考えるのです。

#### 四 「後ろめたさ」と「良心」

物の怪の实在を信じていた当時の一般の人々は、源氏物語の六条御息所の生霊の記述もそのまま素直に受け容れていたと思われます。しかしその一方で、源氏物語には物の怪現象の实在を疑うような、理性的な思考をもつ人のいたことも記されています。

光源氏は朧月夜との密通が発覚したために、その罪状が定められる前に自分から都を去って須磨に移り住みます。兄の朱雀帝は気弱で穏やかな人柄だったので、自分は無実の源氏を追放してしまったのではないかと気にしていたところ天変がうち続きます。

その年、公に物（おほやけ）のさとし頻りて、もの騒がしきこと多かり。三月十三日、神鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝（みかど）の夢に院の帝（桐壺院）お前の御階（みはし）の下に立たせ給ひて、御気色いとあしうて睨（にら）みきこえさせ給ふを、畏まりておはします。聞こえさせ給ふ事ども多かり。源氏

の御事なりけんかし。いと恐ろしういとほしとおぼし  
て后弘徽殿に聞こえさせ給ひければ、「雨など降り  
空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞ侍る。軽々  
しきやうに、おぼし驚くまじきこと」と聞こえ給ふ。

(明石・二五一頁)

朱雀帝から、夢に亡き桐壺院が現れて叱責された、と聞いた弘徽殿太后は、こんな雨風の乱れ吹く暗夜には気のせいでそんな幻影が見えたりするのだ、軽率に驚いてはならぬと諫めます。一般の人々であれば信じたはずの夢の桐壺院のことを、それはそなたが心弱くなつていたことによる幻だ、「疑心暗鬼」に過ぎない、ときつぱり否定しています。当時にもこんな合理的思考をもつ人もいたのです。この弘徽殿太后はすこぶる強靱な精神をもち、常に理性的に考え対処する人で、源氏物語の描きだしたすぐれて個性的な人物なのです。

物の怪現象を気のせいだとする合理的な思考は、紫式部集にも例が見えます。

絵に、物の怪憑きたる女のみにくきかたか図描きたる後ろに、鬼になりたる元の妻を、小法師の縛りたる図描きて、男は経読みて、物の怪責めたるところを見て、

亡き人にかごととはかけてわづらふも己が心の鬼にやは

あらぬ

返し

ことわりや君が心の闇なれば鬼の影とはしるく見ゆらむ  
(紫式部集)

この贈答はとても難解で諸説ありますが、物の怪の憑いた醜い女(画中の男の先妻)の姿を描いた絵があつて、その鬼になつた女の背後から、小法師がその女を縛り付けている図が描いてあり、男(二人の女の夫)が読経して物の怪を追ひ払おうとしている画面を見て、式部が画中の男になつて詠んだ歌、というのでしょうか。男は読経しながら、どうしてこんなことになつたのかと考えての歌で、「亡くなつた元の妻に対して、私が新しい妻をもつたと恨んで物の怪になり、いまの妻に取り憑いたのだろう、と言いがかりを付けて、自分で氣にしてこんなに苦しんでいるのも、実は私自身に後ろめたい氣持があるために、幻の鬼を見ているのではないのか」といったものでしょうか。

返歌は、やはり画中に身を置いた式部が、その男の歌に対して詠んだもので、「その通りだ、あなたの心が闇の中で迷っている有様なので、ありもしない鬼(物の怪)の姿がはつきりと見えているのだろう」といったものと考えます。「君が心の闇」は男の歌の「己が心の鬼」に対応していて、この語からも男に詠みかけた歌とわかります。

この贈答歌からしても、紫式部には物の怪の現象を当人の「心の鬼」によるものと考えるところがあった、少なくとも物の怪の實在をかなり疑わしく思っていたことがわかります。前述の弘徽殿太后のような人もいて、当時こうした理性的合理的思考をもつ人々が、いまだ少数ではあるにしても現れてきていたのです。そして、紫式部自身は物の怪現象を疑わしく考えていながらも、六条御息所の生霊については、一般の人々と同じ立場に身を置いて、物の怪は實在するものとして書いたのだと考えられます。

「心の鬼」の語は、十世紀中ごろ成立の『一条摂政御集』に初めて見えるもので、源氏物語には一五例もあります。現行の注釈書類ではその用例のほどどについて「良心の呵責」、つまり自身の良心に責められて心を痛めることをいうとしています。ただしそう考えるためには、その前提として当時既に「良心」という概念が成立していなければなりません。前述のごとく当時の人々にはまだ十分に「良心」は確立していず、かすかな萌芽の段階のものにすぎなかったと考えられるので、良心の呵責説には従えないのです。

この「心の鬼」の語については、早く本居宣長が次のように述べています。

物語ぶみなどに、身にあやまちのあるものの、人は

さることしらねども、おのが心からおそるゝを、心の鬼オニといへり、からぶみ列子リョウシ注に、疑心生ス闇鬼ヤミ、といへることあり、こゝろばへよく似たること也。

(玉勝間・三・心のおに)

宣長のこの説明では、「何かわるいことをなした人が、他人はそれを知らないのに」、当人は内心で気にして恐れおびえることだということです。もっとも宣長の用いた「あやまち」を、わかりやすく「わるいことをなした」とまで言い換えると、宣長説の真意を損なうかもしれません。しかし宣長の「あやまち」は、「人はさることしらねども」とあることからすると、「倫理に外れたこと」を考えているからです。かなり「良心の呵責」に近くて、倫理性には関わらない漢語の「疑心暗鬼」とはやや違います。

漢語の「疑心暗鬼」は、「心疑生闇鬼、眼病見空花」(梁朝傳大士頌金剛經、大正大藏・二七三二)、「諺曰、疑心生暗鬼」(列氏・説符、口義)などと見えるもので、俗にいう「幽霊の正体見たり枯れ尾花」と同様の、恐れったり迷い疑う心があると、ありもしない鬼が見えるというものです。ここには倫理性はふくまれていません。「心の鬼」を「良心の呵責」だと考えるには、当時の人々の心に「良心」と呼ぶべき倫理概念が既に成立していることが必要です。しかし倫理に関しても深い問題意識をもつ源氏物語にも、



「良心の呵責」とすべき明確な例は探せません。源氏物語に使われている「心の鬼」の用例すべては、この漢語の「疑心暗鬼」と同義のものとして解することができると私は考えます。

源氏物語の光源氏は、父帝の妻藤壺と密通して子を儲けただけでなく、藤壺と共に二人の子冷泉院を帝位に即けます。だが源氏物語にはこの二人を不義不倫の人として非難する記述はありません。源氏自身は「人知れず、あやふくゆゆしう思ひきこえさせ給ふことしあれば、我にその罪を軽めて許し給へ、と仏を念じきこえ給ふ」（賢木・一三八頁）と怖れています。それは冷泉院が桐壺院の子ではないと世間に知られ、わが子が帝位に即けなくなることへの怖れであり、自己の不義不倫についての「良心の呵責」ではありません。この「罪」も、冷泉院の背負って生まれたきた厭うべき宿命、人力ではどうにもできない前世からの罪障や宿業など、仏教でいう「罪」であり、人間の意志や努力を超えた摂理のものにあるものですから、倫理的な性格をもちません。源氏物語には、他人には知られていないが、自身のなした「わるい行為」について密かに心中に痛みをおぼえる、という「良心の呵責」の概念はまだ明確には認められないのです。源氏物語の人々は、自分のなした「わるい行為」も、他人に知られない限りは存在しな

いと同じという意識で生活している、というよりは無意識のうちにそれを前提にして暮らしている人々なのであり、敢えていえば、自分の「わるい行為」が人に知られることは恐れても、その行為自体に良心の呵責をおぼえることはない、という意識の人々の社会に生きているのです。

十世紀に入ると、そんな人々が「物の怪」を見るようになる、自分を強く恨んでいると思われる人の霊を幻視するというのは、自己のその相手への冷酷な対し方に、なにがしか後ろめたさや居心地のわるさをおぼえ始めたからではないか、それはかすかな「良心の萌芽」と認められるのではないかと私は考えるのです。葵上は車の所争いによって六条御息所を侮辱したとは心づかなかった知れませんが、供人たちの騒ぎは見えていたはずであり、やがては葵上も御息所のつらい身の上を思いやることもあったでしょう。物の怪という現象は、取り憑く霊と憑かれる人との相互関係によって成立するものであり、御息所の生霊の発現にも、御息所自身の世間に対する激しい怨念だけではなく、その御息所の口惜しさを思いやることのできる一般の人々の存在もまた必要なのです。

六条御息所の物語は、当時大きく問題になってきた物の怪現象をとりあげることににより、「良心」の発生という人間の奥深い心を示したものとしても、源氏物語のすぐ

れた達成の一つになっています。